

K・ヤング著

『イスラム農民と国家』

—西スマトラにおける1908年

反税反乱—』

Ken Young, *Islamic Peasants and the State: The 1908 Anti-Tax Rebellion in West Sumatra*, New Haven: Yale University Southeast Asia Studies, 1994, xviii+361 pp.

植村泰夫

I

本書は、1908年に西スマトラで金納税導入に反対して勃発した農民反乱の性格を検討しようとしたものである。著者によると、この運動は初期にはパンフル（大家族長）などの指導下に平和的手段で進められたが、後にはスーフィー派（神秘主義）イスラムタレカット（教団）・シャッターリアー派のウラマ（宗教教師）の指導する武装闘争に発展し、ミナンカバウの心臓地域であるクマン、パティプ、バリアマンの3つの中心地で最も激しく展開された。この反乱を、著者はミナンカバウ社会の長期的な変動のなかにおいて検討し、政治的にはナガリ（村落）とスラウ（イスラム学校）の権威と制度的なメカニズムを動員して国家に反抗した最後の大きな試みであり、植民地国家とミナンカバウ住民の政治的関係の決定的転換点であったが、社会経済的には転換点を意味するものではないと性格づけている。

こうした結論を導き出すために、本書では反乱の前提となる西スマトラの社会・経済構造、宗教、オランダの植民地支配の問題、およびこれらが相互の規定性の中でどのように変化してきたかといった点が詳細に記述される。論点は多岐にわたるが、それらは、(a)この反乱が、従来いわれてきたように、ミナンカバウ社会を「伝統」から「近代」へと分かつ分水嶺

であるか、(b)反乱の動機とリーダーシップの問題、という2点に収束される。本書の構成もそれと対応して、次のように大きく2つに分けられている。すなわち、序章(Introduction)でこの地域の特色および基礎的概念の解説、これまでの1908年反乱のとらえ方とそれに対するコメントが述べられた後、これに続く第2章「反乱の政治的起源と経過」、第3章「神秘主義イスラムの勃興と衰退」は「反乱とその起源」というタイトルでまとめられ、以下、第4章「1926年における経済的地理的差異」、第5章「強制供出制度」、第6章「農民家族と国家の独占」の3つの章には「ミナンカバウ心臓部における社会的および経済的变化」というタイトルがつけられている。そして第7章が「結論」である。

ただ、各章の内容は同じ論点の繰り返しも多いので、以下では章ごとに内容を詳しく紹介することは避け、先に触れた2つの点について著者の議論を再構成して紹介したい。

II

著者によれば、スフリーケに代表される従来の研究は、この反乱を、それまでの安定的で自然経済に基づくミナンカバウの「伝統社会」が突然に近代世界にさらされるようになった歴史的分岐点としてとらえてきた。著者はこれを2つの点から批判する。第1に、スフリーケによると反乱以前の各ナガリは自給自足単位とされ、地域全体はこれらの単なる集合体であると見られているが、全社会構造に最も基本的な生存部門の生産が農民小家族の構造を通して商業部門と結合している結果、経済単位の再生産の回路はナガリの境域を越えており、ミナンカバウの経済は決して自然経済と見ることはできない。第2に、スフリーケは「資本主義がこの自然経済を解体する」ことを自明のこととして社会経済の実際のメカニズムを十分には検討しなかったが、現実にはミナンカバウの農民経済は20世紀以降の資本家的市場への従属の中でもそれに完全に支配されることなく生き抜くことができたのであり、その結果、商品生産ブームの中での最大の受益者はヨーロッパ企業で

はなく小農であった、それを可能にしたのは、この地域の農民が長い商品生産の歴史を持っていたからだとする。

これらの点を、本書は次のような手続きで論証する。

著者はまず第4章で、1926年の「西スマトラ報告」に依拠して反乱後の商業作物ブーム下のミナンカバウ社会の構造を検討し、生産活動を生存部門と商業部門に分けてその地域的分業を見るだけでは不十分であり、両者が各村落内に並存していることがより重要であるとする。すなわち、生産と消費の基本単位である各農民小家族内では、女性労働が生存部門に集中し男性労働の大半が商業部門に投入されるという生産的労働の性的分業が存在するのである。この場合、生存部門の主要生産手段である水田には母系制大家族の統制が働くのに対して、商業部門はそれからより自由であるため、男性はそこで成功すれば大家族からの独立性を強めることが可能であるが、商業部門の大半は小規模であるために生存部門の生産に依存せざるをえない構造になっているとする。実際、商業部門は消費需要の一部を生存部門から獲得することや、宗教税の一部をパンフルが負担するといった形で支えられているのであった。同時に著者は、こうした小家族の生産構造の分析だけで社会の特徴の全てが理解できるわけではないとし、上位の社会との相互規定性を重視すべきことを強調している。

著者は、以上を踏まえて19世紀のミナンカバウ社会経済を検討する。すなわち、第6章では生存部門で最も重要な栽培である米作の分析を通して、それが個々の女性と小家族の手で個別的にコントロールされていること、こうした経済活動の基礎単位である小家族内では、やはり女性が主として生存部門、男性が商業部門へと労働力を集中する性的分業が存在していることを明らかにする。

こうした生産の構造は、コーヒー強制供出の初期の成功を支えるものでもあった。第5章によると、オランダにとってコーヒー栽培を進める道は、母系制大家族の土地支配を打破する方向と、小規模農民の生産のパターンを黙認して強制とインセンティブ

の組み合わせによって剰余収奪を図る方向の2つの選択肢があったが、後者が選択され、制度の初期には生け垣や森林における小規模コーヒー園での栽培で大きな成果を上げることができた。それは、農民にとってコーヒー栽培が通常商業部門の生産パターンと変わらず、しかも極めて少量の労働投入で栽培可能な方式であったこと、そしてオランダの支払うコーヒー代金は資本家的合理的経営からみれば明らかに不十分な、非常に低い価格であったが、商業部門の生産が生存部門によって支えられるという、ミナンカバウ独特の家族内の分業のあり方によって可能になったのである。加えて、この時期、沿岸大商人による貿易独占が輸入品の価格を異常に上昇させたため、農民は現金収入を求めてコーヒー栽培に向かわざるをえなくなった。したがってまた、19世紀末、生産増のために大農園方式が導入され栽培の合理化が図られた時、投下労働力を増やさなければならなくなったために農民の栽培意欲は減退したが、それが栽培衰退の主要な原因となった。

このように、19世紀と20世紀のミナンカバウの農民家族の生産組織の構造は形式的には同一であった。ただし19世紀の再生産条件は20世紀とは大きく異なり、商業部門の機会はより限定的であった。それはコーヒー栽培とインフラストラクチャー整備のために要求された労役のために、商業部門の活動がかなり阻害されたからである。加えて、オランダが村落単位での米自給を図ったことによって、村落経済は次第に自給の度合いを強めざるをえなくなり、さらにこのことは米生産の減退をも招いた。この結果、村落経済は貧困化し、コーヒー栽培が衰退した時、それに代わる現金収入源を十分に確保できなくなっていった。

それでは、こうした家族生産の性格はいかなるものであったのか。著者は19世紀の家族を、(1)安定した米生産者、(2)混合生産者、(3)商品生産専業者、(4)貧困な生存部門農民、の4タイプに分け、それぞれの現金不足に対する対応は異なるとした上で、これらの家族生産は決して資本家企業に似たものではなく、生存部門の大半は市場の力が及ばない外部に残っており、明らかに「非資本家的経済単位」である

とする。こうした生産の性格ゆえに、20世紀以降の資本家的市場への従属の中でも、ミナンカバウ農民経済はそれに完全に支配されることなく生き抜くことができたのであった。著者によれば、その基本的な理由は、生存部門の生産が農民小家族と母系制大家族によってコントロールされ続けたことに求められるのである。

III

この反乱の動機、原因についての著者のとらえ方は、19世紀の植民地支配浸透によって社会経済が変化した結果生じた大衆的な不満と、反植民地感情を動員できる宗教的世界観が結びついたものであり、それを組織したのがスラウに基礎をおいたシャッター派のウラマであったという点に要約できる。

それでは民衆の不満はどのようなものであり、いかなる原因で発生したのであろうか。この問題は主としてコーヒーの強制供出の歴史的検討の中で論じられている。先に触れたように、コーヒー栽培は19世紀末から衰退し、そのことは農民の現金不足を深刻化させた。したがって、農民は現金での課税に対しては極めて神経質にならざるをえなかったのであった。加えて、アチェ戦争終結という状況下で、政府が従来への慣習を無視して一方的に課税を宣言したことも大衆的な不満を引き起こしたのであった。

それでは、なぜ、シャッター派ウラマがリーダーとして登場したのであろうか。著者は、その理由を、同派がミナンカバウ社会の中で、同じスーフィー派の他セクトであるナクシュバンディー派、後には近代派イスラムの台頭によって次第にその地位が低下しつつあり、それを食い止めようとして反乱に立ち上がったのであったとする。

著者によると、19世紀後半期ミナンカバウ社会では、村民の生活は村落をはるかに越えた広がりを持つ社会的諸関係によって直接に影響されるが、その頂点にあったのが植民地国家であった。植民地国家は間接支配を進めるため、それに役立つエリート層としてトゥアंक・ララス、パンフル・クパラなどの地方支配層を後押しした。こうして彼らはコーヒ

ー強制供出から利益を得る新しい植民地的支配階層＝疑似伝統エリートへと再編された。そして、これらと村民をつなぐものとしての役割を担ったのが、従属エリートもしくは中間エリートであり、彼らが反乱の中で最も重要な役割を果たすことになる。このグループは、慣習法と母系制所有に権威の基礎をおき、植民地体制内に位置するパンフルや宗教役人など、および植民地支配システムからより独立的で、神秘主義派のネットワークに依拠した自由イスラムエリートからなる。反乱のリーダーとなったのは主として自由イスラムエリートであり、逆に疑似伝統エリートは常に民衆の敵意の対象となった。

この自由イスラムエリートの存在様態は、特に第3章で詳しく検討される。問題のシャッター派はミナンカバウでは17世紀に設立された最も古いセクトであり、18世紀には最も有力なスーフィー派教団となった。そこに属するウラマは各地のナガリにスラウを設立して教えを広めたが、スラウは母系制家族内で育つこの地域の青年男子にとっては極めて魅力的な場であったため、多数の生徒を集めることができた。そして、そこでは教師と生徒の密接な関係が形成され、そのことが反乱の組織において大きな役割を果たした。また、スラウは自らの必要を自給するため、自らが栽培した作物を地方市場で販売するなど強い商業志向を有し、そのことは商人階層を引きつけ、スラウとタレカットのネットワークはミナンカバウ心臓部における最も有用な、ほとんど唯一の地域的に広がりを持った接触と相互信用の母体となった。こうした形で発展したシャッター派は、慣習法派宗教役人の権威を掘り崩す形で勢力を広げていった。

このようにシャッター派の活動は、伝統的な慣習法に基づく家族や村落を越えて行なわれたのであるが、慣習法派エリートと対立したのではない。ナガリ内にウラマが地位を確立するためには、彼らとの密接な関係が不可欠であり、両者の間には相互の適応が常に存在した。むしろ、シャッター派を脅かすものは、イスラム内部における新しい動きであり、まず、19世紀後半に再興されたナクシュバンディー派がスーフィー派教団の中では最大の勢力

を持つものに発展し、特にパティブとパリアマンで激しくシャッター派を攻撃した。さらに、20世紀初めに台頭した改革派イスラムは、スーフィー派の非合理性を激しく攻撃し、宗教学校の支配をめぐる激しく争った。

こうした2つの攻撃によって、シャッター派の勢力は次第に低下していったのである。1908年反乱は、こうして危機に瀕したシャッター派の再興をかけた抵抗としてとらえられるのである。

IV

以上、本書の論点を2つに分けて紹介してきた。以下、これらについての評者の感想を述べておきたい。

第1の論点、すなわち、この反乱の前後の社会的経済的構造の連続性については、説得的に論証されていると思われる。とりわけ、その過程で、家族内の性的分業の構造とその特色を明らかにした点は、大きな成果であるといえよう。その結果、コーヒー強制供出制度の初期の成功と後半の衰退をこの面から位置づけた部分は、従来なかった独自の見解を提出しており、興味深い。

本書では、このように農民家族の構造の検討に力点があり、それとのかかわりで先に述べた家族のタイプ分けにもかなりのページが割かれており、それ自体は興味深い。著者はその有効性として、「現金不足に直面した時、どのタイプの家族、どの地域が経済的に最も脅威を感じたかを推定」できること、「1908年反乱発生の重要な局面である、民衆の不満の物質的基盤を明らかにする上で有効」であることをあげているが、本書ではどのタイプの農民が反乱の主力であったかという点の分析にまでは至っていないことが惜しまれる。

次に、疑問点を2つほどあげておく。第1に、本書では検討の中心が農民家族に置かれたためか、村落の社会経済的な役割の検討がほとんどなされていない。評者も、著者が植民地期のナガリは「村落共和国」ではないとすることに賛成であるが、それにしてもそれが農民家族の再生産に果たした役割は

もっと検討されてよいのではないかと思う。第2に、全体として、農民家族を取り巻く外在的経済条件の具体的検討が十分ではない。この結果、著者は19世紀ミナンカバウ社会を自然経済ではないとする一方で、20世紀と比べると商業部門の機会はより限定的であったとするのであるが、両者の時期の質的な違い、それが農民家族に及ぼした影響については必ずしも明らかではないように思う。

第2の論点に移ろう。イスラムの果たした役割、そのネットワークと反乱の広がりとの関係、慣習法派エリートとの関係、反乱を主導したシャッター派の勢力低下などに関する記述は詳細であり、極めて説得的である。著者がリーダーシップの問題を論じるにあたって、イスラム内部の対立と各派の勢力の消長に着眼したことも高く評価されるべきであろう。しかし、それにもかかわらず、1908年反乱のリーダーシップを取ったのがなぜシャッター派なのかは、なおよく分らない。

著者は第3章結論部分で、スーフィー派教団一般が近代派イスラムと政庁の権力行使によって危機に瀕しているにとらえており、そうであれば、地位の低下という条件はナクシュバンディー派にとっても同様であったはずである。したがって、1908年のリーダーシップが何故ナクシュバンディー派ではなくシャッター派であったのか、何故ナクシュバンディー派は動かなかったかの説明が必要ではないかと思われる。

以上、思いつくままに感想を述べてきたが、本書は全体としてミナンカバウ社会の構造的特色を巧みに描き出すことに成功しているといえよう。また、ミナンカバウの家族生産は長い商品生産の歴史を持ちつつも非資本家的であるがゆえに、資本家的市場への従属の中で生き抜くことができ、農民が商品生産ブームの中で最大の受益者となり得たという、近代的植民地支配と現地社会のかかわりに関する本書の論点は刺激的であり、今後、ミナンカバウ研究のみならず、インドネシア研究一般においても議論されねばならないと思われる。

(広島大学文学部教授)